

月 報

— 學 會 —

大日本耳鼻咽喉科會北陸地方會第53回集會記事

種 村 龍 夫 編

期日 昭和16年3月2日 於 金澤醫科大學

1) 我教室最近5年間に於ける外來患者に就て檢したる血液微毒反應

平 田 秀 雄

余は最近5年間に我外來患者に於て檢せる微毒血液反應(ワ氏, マ氏, 村田氏反應)の試験成績を蒐輯せるに検査人員321名中98名, 約30.5%に於て陽性者を見

たり。今是等陽性者に於ける耳鼻咽喉科疾患を見るに次表の如し。

聽 器 疾 患		鼻腔副鼻腔疾患		咽頭口腔疾患		喉 頭 疾 患	
外 耳	1	1	鼻微毒 3	咽頭微毒第二期 2	亞急性喉頭炎 1		
			鼻中隔彎曲症 4	咽頭粘膜腫 5	喉頭微毒 2		
中 耳	急性單純性中耳炎 6	27	血管神經性鼻炎 1	慢性咽頭炎 2	慢性喉頭炎 3		
	急性穿孔性中耳炎 5		慢性單純性鼻炎 1	亞急性咽頭炎 2	喉頭ポリープ 1		
	乳嘴突起炎合併 前に硬腦膜外膿瘍合併 (3)		慢性肥厚性鼻炎 2	急性咽頭炎 1	慢性喉頭下腔炎 1		
	慢性穿孔性中耳炎 (内手術施行) (1)		鼻 茸 1	急性扁桃腺炎 1	會厭軟骨膿瘍 1		
	慢性中耳カタル 8		慢性上顎洞炎 5	扁桃腺肥大 1	喉頭癌 2		
	中耳炎後遺症 1		瘰 癧 1	サルバルサンアグラモロチトーゼ 1	其 他 2		
内 耳	迷路微毒 5	上顎骨炎 1	舌 癌 3				
	神經性難聴 2	其 他 2	口内炎 1				
	神經性耳鳴 1						
	外傷性内耳炎 1						
其 他 5							
計	41		21	19		13	

追 加

豊 田 文 一

最近半々年に私の外來に於て血液検査を行ひ微毒反應陽性なりしもの25%であつた。尙その中興味ありしは72歳♀にして、前頭洞「ムユツエーレ」或は前頭骨腫

瘍を疑はれしもので、血液検査の結果前頭骨ゴム腫と診断せられ、驅微療法にて治癒せる症例を経験した。(自抄)

追 加

松 田 龍 一

嘗て此例會席上で申述べたことであるが、患者の主訴とする病變、就中それが黴毒性のものと推定せられる場合に於て診断を確定するために黴毒に對する諸種血清反應を検査することは必要なことであるが、黴毒性のものでない他種病變でも患者が黴毒で汚染せられてをる時は屢々その治癒經過に悪影響がもたらされる

ものであることは私共日常經驗するところである故に、此意味に於ても黴毒の有無を検し、反應陽性なる時は之に對し適當な處置を施すことは間接に現存する病變の治癒に好影響を及ぼすもので、甚だ肝要なことと考へられる。(自抄)

2) 栓塞部を有せざる顎補綴に就て

和 田 直 樹

顎補綴は齒科技工學的方法を以て顎切除後に起り得べき顎貌の醜形並に口腔内諸種機能障礙を最大限に排除し、天賦の形態並に機能を營爲せしめんとするにあり。之が業績並に報告は頗る多く Witzel (1902年), Schröder (1905年), Billing (1910年), Martinier (1917年), 榎本 (大正6年), 齋藤 (大正8年), 遠藤, 都築 (昭和10年), 岡田 (昭和10年), 光永 (昭和15年) 等の諸家を主なるものとす。

而して内容を觀るに其進歩は専ら即時補綴方面に存し、永久的補綴方面に於ては遺憾乍ら從來の方法を應用する程度に過ぎざる状態にあり。

余は上顎片側補綴に於て栓塞部を附せざる方法を採用し好結果を得し數例を有するが故に茲に其概要を報告し以て諸家の御示教を仰がんとす。

症例 I は79歳の男子、症例 II は57歳の男子にして何れも悪性腫瘍治療の目的にて左側上顎を切除せるものなり。術後35日に補綴を嵌入し、顔貌は著しく快復

し、發語並に嚥下障礙を除き、含嗽時液體の鼻孔流出を全く防止するを得たり。

從來に於けるものは栓塞部の調製に當り先づ基礎床を作り、二次的に缺損部の印象を採得し、此缺損部に一致する「ゴム製或は金屬製の栓塞部を基礎床に連結せるものなり。而して栓塞部の重量を軽くする爲に内部を中空にする等、著しく複雑なる操作を取へて遂行せるものなり。余の方法は此栓塞部を附せざるが故に補綴製作の簡易を齎すこと明らかなり。

更に、栓塞部を有する補綴體は咀嚼時或は談話時に於ける微かなる動搖により缺損入口部粘膜面の摩擦を來し、糜爛面を形成し、著しきときは潰瘍を招來することありしに、栓塞部を附せざることにより斯の如き不快なる損傷を防止するを得。

即ち、栓塞部を附せざることにより顎補綴の目的達成上如上の缺點を防止するを得たりと信ずるものなり。(自抄)

3) 扁桃腺摘出10年後に見たる口蓋扁桃腺周圍膿瘍

仙 石 尙 夫

約10年前兩側口蓋扁桃腺摘出手術を受けし26歳の男子。

右側咽頭痛を主訴として來院。初診後2日目に至り發熱 38.6°C、咽頭痛、嚥下困難甚しく高度となり、右側前後兩口蓋弓部より軟口蓋にわたり中等度の發

赤、腫脹を認め、切開により相當深部の化膿竈より排膿を得、數日にして全治せしめたり、尙發病當時及び治癒後と雖も肉眼的には兩側扁桃腺痕部に扁桃腺殘存組織らしきものは認め難し。(自抄)

4) (イ) 耳下腺手術後に來れる高度の軟口蓋, 咽頭浮腫致死例

渡 邊 孝

患者は51歳男子。胃切除術後4日目右側耳下腺炎を惹起し、次で10日目切開の止むなきに至れり。然るに切開後3-4時間にして高度の呼吸困難を來し、更に切開10時間前後に意識不明に陥れり。切開前殆んど全く變化なき口蓋垂及び之に近接せる軟口蓋及び咽頭後壁は甚だ高度なる浮腫を來し、殆んど空氣の流通の餘

地なき觀を呈せり。呼吸困難甚しき爲午前2時廻診を外科より依頼されたるものにして、喉頭の検査は到底行ひ得ず。唯咽頭を辛じて檢し上記の所見を得たるに過ぎず。然も之が検査中(約20-30秒間)容態急變し遂に死の轉歸をとれり。浮腫は單に咽頭のものに止らず、恐らくは喉頭に及べるものならんと思惟す。(自抄)

(ロ) 急性扁桃腺炎に繼發せる「アヒレス腱炎患者供覽

患者は50歳女子。來院2-3日前より咽頭痛を訴へ居たるに、來院翌日より急激に左側「アヒレス腱部に疼痛を來し、歩行殆んど不可能となれり。診るに扁桃腺及び咽頭粘膜の發赤、腫脹、疼痛は殆んどなく(來院翌々日所見)、左側「アヒレス腱に相當する部には可

成りの腫脹、發赤、壓痛あり。自然痛なく、足關節の左右前後の運動に際しては軽度の疼痛あり。右側「アヒレス腱部は輕き壓痛のみ存す。數日の對症療法に依り全治せり。(自抄)

追 加

豊 田 文 一

呼吸困難を主訴とせる62歳の男子、喉頭の所見は披裂部に可なり高聳の浮腫狀の腫脹がある。その原因は検索の結果腎炎によることが確められた。尙その際撮

影せられた喉頭「レントゲン」断面撮影像を供覽し、併せて喉頭疾患、殊に喉頭腫瘍の場合に於ける「レ」線断面撮影の効果につき附言した。(自抄)

5) 咽頭結核に於ける舌咽神經「アルコール」注射による持續的鎮痛作用に就て

豊 田 文 一

咽頭結核に於ける咽頭痛に對しては從來局所麻醉劑の塗布、或は散布を行ひ、一時的の鎮痛を得られたに過ぎなかつた。最近天野氏が15例の咽頭結核の患者に對して舌咽神經への酒精注射をなし持續的鎮痛の良効果を擧げた。演者は同氏の術式を追試し満足すべき結

果を得た。3名の患者に於て7回の注射を行ひ、酒精は80%を用ひ、4日乃至8日間の持續的鎮痛作用を認めた。尙その際軽度の味覺障礙と軽度の食物の鼻腔逆流があつた他營養障礙或は局所所見の悪化を來さなかつた。(自抄)

6) 我教室最近10年間に於ける齒牙囊腫の病理組織學研究

山 田 文 雄

我教室最近10年間に於ける齒牙囊腫患者より得たる標本に就き、「ヘマトキシリン・エオジン染色にて組織

標本を作製し、先人の報告せる病理組織學的所見特に齒根囊腫に就て比較考察せる結果を述べたり。(自抄)

追 加

豊 田 文 一

齒牙囊腫の成因に就いては 今尙議論のある 所である。かつその殆んど總ては齒根の炎症より發生すると云はれてをる。併し齒根端の炎症の大部分が齒根囊腫を形成するものではない。私の病院の齒科に於て撮影せられた齒根炎を有するものゝ多數の「レ」線像を觀察し、齒根囊腫を形成せるものと齒根骨髓炎を惹起せるものとに大別出来る。等しく齒根に炎症を有しながら

齒根囊腫の形成と齒根骨髓炎の發生との相違を來す過程は注意すべきものである。私は興味を以てこの觀察を行つてゐるものであるが、その炎症の状態、或は體質による所もあらうが、局所の解剖的關係が、この相違を來す一つの原因ではなからうかと考へてゐる。
(自抄)

7) 前頭洞炎鼻外根治手術と其絶對的適應症

種 村 龍 夫

慢性化膿性前頭洞炎の手術的解決に關しては所謂根治に主眼を置くか、將亦美容上の問題に立脚するかの着眼點の相違により臨床家をして其歸趨に迷はしむる場合がある。

翻つて所謂根治的療法中有名な Killian 氏法に就て見るに Killian 氏は92.4%の全治率を擧げて居るが、其後の諸家の研鑽によれば Killian 氏の云ふ如き高率の治癒を得る事は困難である。Tatrallyay 氏は慢性化膿性前頭洞炎の根治は著しき醜形を貽すを顧慮せざる Riedel 氏法のみ可能にして他の如何なる術式に於ても之を根治せしめる事の不可能な事は明白な事實であると極言して居る。Jansen 氏は前頭洞鼻外根治手術は一次的治癒をなしても癩痕及び醜形を貽し、時には Killian 氏月の壞疽、黒内障、眼瞼及び眼麻痺等を來し、就中10年乃至20年の後には寒性膿瘍を見る事屢々であると稱して居る。

而して鼻外根治手術の最も巧妙に施行された場合と雖も其程度の差こそあれ手術創癩痕を貽す事は辭み難い。斯る美容上の問題は壯年以上の男子に於ては一些事に過ぎないが、青少年就中妙齡の婦女子に於ては實に重大問題にて鼻外根治手術の一大缺點と稱しても過

言でない。

鼻外根治手術に對稱的位置を占むるものは其鼻内手術である。鼻内手術中 Halle 氏法が就中有名であり最も進歩したものと稱すべきである。然し日本人の狹隘な鼻腔に於ては其原法通り手術を行ふ事は困難な場合が多いので之を日本人向に變更する要がある。此點に關し久保護躬教授、西端教授、種村等の業績があり、症例を重ね着々良好な結果を得て居る。種村は更に所謂輕症なる前頭洞炎に對してのみならず、從來の見地を以てすれば鼻外根治手術を要するもの對しても鼻内手術は極めて合理的なる療法に拘らず、未だ一般に廣く行はれざる憾あるは極めて遺憾にて之を普及せしめるは今日の急務であると述べてゐる。

今日斯の如く鼻内手術の進歩した時に於ては鼻外根治手術の絶對的適應症は頭蓋内合併症が副鼻腔に基因すると考へらるゝ場合、重症な眼窩内合併症、廣汎な前頭洞骨髓炎等を數ふるに過ぎない。斯る場合は美容上の問題は顧慮する事なく鼻外手術を施行すべきは勿論であるが、普通臨床上斯る重症な疾患に遭遇する事は極めて稀であり、従つて鼻外根治手術の絶對的適應症は極めて稀と稱すべきである。(自抄)

追 加

松 田 龍 一

前頭洞に對しキリアン氏式根治手術を施行しなければならぬ症例は極めて少數であり、今日迄約8年餘の間に於て此臨床で私が本法を施行したものは僅かに

4例前後と記憶してをる。今のお話ではキリアン氏式根治手術を行つたゝめに3例の致死例があつたとの事であるが、私が參つてからの記憶では本手術のために

死の轉歸をとつた様な例は1例とてもないと信ずるし又實際夫等の患者は今日も尙現存してをる。次に前頭洞を開放したとき後壁が既に消失し硬腦膜が露出して

をることもあるし又例へ手術によつて硬腦膜が露出してもそれだけで腦膜炎を惹起するとは考へられない。(自抄)

8) 乳兒中耳炎とその榮養

(乳兒中耳炎の臨牀的研究の1)

豊 田 文 一

乳兒中耳炎50例に就き觀察し次の如き結果を得た。即ち母乳榮養兒26例(52%)、混合榮養兒14例(28%)、純人工榮養兒10例(20%)にして、母乳不足の乳兒は24例(48%)であつた。之を島田、深山氏調査による日赤石川支部産院に於ける健康褥婦300名の調査に現はれた母乳不足者26.7%に比較するに、乳兒中耳炎の罹患者の母乳不足のものゝ百分率は甚しく高い。尙その經過をみるに、母乳榮養兒中の治癒26例中20例(76.9%)、轉歸不明6例(23.1%)、混合榮養兒中の治癒14例中8例(57.1%)、轉歸不明6例(42.9%)、純人工榮養兒中

の治癒10例中3例(30.0%)、轉歸不明7例(70.0%)にして母乳榮養兒に於ける治癒率最も良好にして、純人工榮養兒に於ける治癒率最も悪し。又治癒に至る迄の日數の平均は母乳榮養兒12.7日、混合榮養兒14.5日、純人工榮養兒29.9日であつた。以上の結果より、乳兒中耳炎の發生及び經過と乳兒の榮養との間には密接な關係が認められ、演者は人工榮養を必要とした乳兒に對しビタミン、殊にB、Cを投與し良好なる効果を擧げつゝあることを附言した。(自抄)

9) 電撃性經過をとれる「ムコーズ」中耳炎

渡 邊 孝

患者は48歳男子、約1週間前より風邪に罹患し居たるが、急激に右側耳痛を訴へたるも、其翌日に至り殆んど耳痛去れり。當時地方醫より中耳炎と云はれたり。然るに耳痛發現翌々日より意識瀕濁し、腦膜炎の診斷の下に當學内科に轉送さる。耳性腦膜炎に非ざるやとの疑の下に廻診を依頼さる。當時の所見は鼻腔、咽頭は發赤以外著變なし。左側鼓膜は著變なきも、右

側鼓膜は上方發赤し、他は寧ろ蒼白の感あり。膨隆全くなし。鼓膜切開時得たる極めて少量の血性塗抹標本より多數の「ムコーズ」菌を證明せり。内科に於て得たる腦脊髄液より同様「ムコーズ」菌を證明し、茲に「ムコーズ」中耳炎に繼發せる腦腫炎なる事確定せり。事情に依り手術を行ふ事なく翌々日死亡せり。(自抄)

10) 最近我臨牀に於て取扱ひたる「ムコーズ」菌中耳炎に就て

松 田 龍 一

金澤醫科大學耳鼻咽喉科學臨牀に於て昭和15年度中に入院加療せしめた「ムコーズ」菌中耳炎に就いて臨

牀的觀察を行ひ其大要を述べた。詳細は治療及處方第261號(昭和16年11月發行)に登載せられた。(自抄)

大日本耳鼻咽喉科會北陸地方會第54回集會記事

種 村 龍 夫 編

期日 昭和16年5月18日 於 高岡市富山縣産業組合第一病院

1) 外聽道黴毒性「コンヂローム」

飯 倉 保

本症例は慢性中耳炎を伴へる24歳の農夫の外聽道入口部に發生せる黴毒性「コンヂローム」の一例にして、自覺的に輕度の疼痛を訴へたり。同時に口蓋扁桃腺に多數の 小なる 黴毒性白斑を認め、血液黴毒反應はマ氏、ワ氏、村田氏反應共に強陽性を示せり。

演者は本症の發生は偶々外聽道に發生せる黴毒丘疹が中耳炎分泌液にて絶へず濕潤され、加ふるに分泌液清拭操作により刺戟を受け糜爛面生じ、反復せる前述刺戟により益々増悪終に「コンヂローム」を形成するに至れるものと推斷せんとすと結論せり。(種村抄)

2) 乳様突起の發育形成に就きて

吉 見 正 夫

演者は612例の側頭骨に就きて、乳様突起の大きさ或は形狀等と其内部の乳様蜂窠發育度との間に於ける相關關係を検索し、之より乳様突起の發育形成に對する含氣機轉の意義に就きて種々考察を加へ、結論とし

て乳様突起發育形成には突起内含氣機轉並に胸鎖乳嘴筋の干渉するを推定し得且つ兩者の内胸鎖乳嘴筋の作用がより主役をなすものならんとせり。精細は原著として十全會誌(第46卷第10號)に發表せり。(自抄)

3) 乳兒中耳炎の臨牀的研究の2 滲出質體質の標徴

豊 田 文 一

私の外來で最近經驗した83例の乳兒中耳炎症例に就いて、その滲出性體質の標徴に就き觀察した。Czernyの提唱に従ひ、その皮膚表面に現れたる標徴、即ち痒疹、脂漏、乳痂、麻癩疹及び濕疹に就いて觀察した。

検索せる成績は九大兒科教室に於て一見健康兒とみ

られる乳幼兒に就いて行はれた清野氏の成績に比し、各變化共可なり高率に現れた。即ち乳兒に於ける中耳の罹患に對しては體質的素因、殊に滲出質體質も密接なる關係を有することを明らかにした。(自抄)

4) 耳性外旋神經麻痺の1例

野 田 徳 次 郎

患者は34歳の男、最初左眼の麥粒腫を生じ、それより兩側の眼窩蜂窩織炎、化膿性腦膜炎を續發せしに、ズルフオンアミドの大量投與、脊髓腔内注入等を行はし、輕快せしめた所、兩側の急性中耳炎より、右側急

性乳嘴突起炎を併發し、右側外旋神經麻痺を生じ遂に右側耳の根治手術を行ひ、更に前及び後迷路周圍蜂窩より錐體尖端蜂窩に通ずる瘻孔を作製して排膿せし所、幸に治癒せる一例を報告せり。(自抄)

5) 前頸部皮膚様囊腫(標本供覽)

渡 部 弘

33歳男, 約10年前に前頸部に腫瘍發生し漸次増大し穿刺を受けしことあり。以後約3年毎に該部は同様の腫脹し, 穿刺を數回受けしと云ふ。今回の該部腫瘍も3年前以來のものにして, 患者は別に苦惱を感ぜざるも時に嚥下運動に際し該部に軽度の壓迫感を訴ふ。

所見。頸部の正中線に於て甲状軟骨の上方に約鉛筆大の皮膚膨隆す。其表面に著色及び靜脈の怒張なし。嚥下運動に際し著明となれり。表面皮膚との間に癒着なし。弾力性はやゝ軟にして良く移動す。局所麻醉下に前頸部のほぼ正中線に約4cmの縦切開を加へ, 周

圍と結締織にて全く境界せられたる腫瘍を完全に摘出す。剔出腫瘍は長さ3.5cm, 幅2.5cm, 厚1.8cm, 表面平滑赤色を呈せる腫瘍なり。内に上皮組織片, 毛髪, 「コレステリン」等を含む。病理組織學的檢索により該囊壁は外側は結締織より成り, 内側は角質, 扁平上皮細胞, 圓柱狀上皮細胞の順に配列せる上皮より成り, 且所により毛囊, 皮脂腺等を認む。依つて前頸部に發生せる皮膚様囊腫と診定せり。尙席上にて剔出腫瘍, 組織標本, 普通寫眞等を供覽せり。(自抄)

6) 特殊村落に於ける綜合檢診(耳鼻咽喉科の所見)

豊 田 文 一

我々は農村保健運動に對する資料を得んとして, 富山縣氷見郡連川村に於て國民學校兒童の綜合檢診を行つた。該村は佝僂病發生地として既に本邦文獻に記載されてゐる所である。私は耳鼻咽喉科の檢索を分擔して次の如き結果を得た。

耳鏡所見として耳聾性聾は比較的尠かつた。鼓膜の内陷も低率であつた。中耳化膿症も亦諸家の統計に比し著しく低率であつた。

鼻腔所見として慢性鼻炎乃至肥厚性鼻炎, 慢性副鼻腔炎は著しく高率であつた。更に萎縮性鼻炎の多きことは注目すべき點である。又鼻中隔彎曲の頻度も大である。

口蓋扁桃肥大及び腺様増殖症は稍高率に認められた。

即ち本檢案によつて得られた成績によれば鼻腔所見に於て佝僂病性傾向のあることが窺はれる。(自抄)

追 加

松 田 龍 一

私が金澤に赴任する時恩師増田先生から出来ることなら地方病といふものがあつたらそのものを研究する様にと申されたが, 北陸地方に多いとされてをる佝僂病に關しては多少心がけてはをつたものゝ怠惰なために之に關してこれといつた仕事もせずにくれてきた。今演者によつてこうした檢索が行はれたのをきくのは

寔に嬉しい。向後一段の御努力を期待するものである。尙本病院に於て院長始め醫員諸賢が仲よく協力して農村の健康増進にあたられ繁忙な診療の餘暇に研究指導にのり出されることは寔に結構な企畫であり, その御努力に深く敬意を表すると共に本病院の益々發展せられんことを衷心より祈念するものである。(自抄)

7) 特殊村落に於ける綜合檢診 齒科的所見

關 剛 三 郎

佝僂病患者の多く見られると云ふ特殊村落富山縣氷見郡連川村小兒兒童286名に就て特殊村落として如何なる口腔所見を有するか永久齒並に乳齒の齲蝕罹患狀

況, 永久齒牙の萌出狀況其他齒牙並に口腔の疾患異常を調査した結果高率なる齲蝕罹患狀況, 永久齒牙の萌出遅延, 齒齦炎, 口角糜爛症, 着色齒牙を認めた

り、ハッチンソン氏歯牙は認め得ず。(自抄)

追 加

松 田 龍 一

佝僂病患者の歯牙状態に關する海外の文獻につき少
しく繙讀したところを追加し、御骨折に敬意を表し

8) 女性の耳鼻咽喉科領域に於ける更年期自覺障碍の統計的觀察(1)

進 宅 外 雄

統計材料372名中、更年期障碍を自覺せるもの178名
(47.85%)なりき。

1) 聴器に關する自覺症状を訴へたるもの13.52%、
鼻に關するもの14.91%、咽喉に關するもの10.49%、
その他のもの61.06%なりき。

2) 鼻に關するものに於ては鼻閉塞(16.85%)、副血
(15.16%)、噴嚏、鼻乾燥感、嗅覺の悪くなるものゝ
順にて減少せり。耳に關するものでは耳鳴(30.89%)、
難聴16.85%、耳閉塞感12.35%の順にして、咽喉に關
するものでは咽喉乾燥感 18.53%、次で味覺の悪くな

るもの、咽喉の不快感、音聲障碍、咽喉異物感の順で
減少を見たり。

3) 初潮年齢の若きもの及高き者に於ては、更年期
障碍を伴ふ者比較的多數なり。

4) 晩婚者にありては早婚者に比し更年期障碍を伴
ふ者多し。

5) 初産年齢の若きものほど更年期障碍少きものゝ
如し。

6) 最終分娩年齢の高年なるほど更年期障碍を伴ふ
者少し。(自抄)

追 加

豊 田 文 一

更年期に於て咽頭の異物感を訴へる患者に私は屢々
遭遇する。此の如き場合舌根扁桃腺の肥大を認め得る

ことも屢々ある。私は之に對して「レントゲン」照射を
試みて効果を得た2,3の症例を経験してゐる。(自抄)

追 加

松 田 龍 一

更年期に於ける女性の咽頭に出現する自覺症候はも
すこし多いものと思つてゐたが、只今の御報告ではそ
れより低率の様である。次に更年期に於ける咽頭障碍
の原因として舌根扁桃腺が擧げられることは尠くない
が、これが肥大せるため機械的に障碍を誘發すること
もあるが格別肥大といふほどのことがなくとも障碍を

誘起することがある。京都帝大の澤田氏によれば肥大
の切除により治癒を期待しうべき症例に於て少しも自
覺症候の輕快をみず、ペラニンの投與によつて漸く治
癒をみるに至ることが尠くないといふことである。

(自抄)

9) 脊髓空洞症(?)による混合性喉頭麻痺(患者供覽)

豊 田 文 一

患者 43歳、農婦。
主訴 開放性鼻音、嚔聲。

10數年前より嚔聲あり、種々醫療を加ふるも治癒せ
ず、開放性鼻音は約1ヶ年前よりあり、共に誘因を認

めず。

局所所見 左側の軟口蓋は麻痺の状態にあり、口蓋垂は右方に偏す。喉頭を檢するに兩側聲帶は略正中位に來り、僅かに間隙を残すのみ、即ち後筋麻痺の状態なり。

以上の所見より舌咽神經麻痺並に廻歸神經不全麻痺を有する混合性喉頭麻痺と診斷せり。更に之が原因的疾患を内科的に檢索せられたるに脊髓空洞症の疑と診斷せられたり。(自抄)

10) 上及び下顎の正中線の一致性に就て

和 田 直 樹

人類諸形質は正中線を境界として其左右部は概ね均齊を保つものなりと雖も嚴格に吟味するならば必ずしも然らず、著しく異にするもの亦尠からず、例之、鼻中隔は正中位を占むると雖も、相當に彎曲度を示すが如く、上顎及び下顎に於ても其正中線の顔面正中位に一致せざるものあり。

Martin は其著 *Lehrbuch der Anthropologie* に於て測定上必要な諸點として顔面正中線上に Bregma, Nasion, Rhinion と共に上顎に於ては Prosthion, 下顎に於ては Infradentale を擧げ、上及び下顎の正中線の一致を正常型と見做せり。

其他、成書文獻を繙くに何れも正常に於ては上及び下顎の正中線の一致を説き、吾人亦日常此事を通念とし來れるも、臨床上不一致を觀ること屢々なり。而して之が究明は矯正齒科學並に齒科技工學に寄與することの尠からざるを信ずるものなり。

偶々、昭和16年4月、石川縣立金澤商業學校生徒の齒牙檢査に際し、特に調査し得たる上及下顎の正中線の一致性に就いての成績結論を報告せんとす。

1) 檢査人員161名に就き上及び下顎正中線の一致性に關し調査せり。

2) 正中線の一致せるもの30.43%、一致せざるものは69.57%なり。

一致せざるものゝ上顎と下顎の比は11.60%對88.40%にして偏位の側別に於て右は42.42%、左は57.58%を示せり。

3) 成因に就いて考察するに偏位と咀嚼の習慣的使用側との間に特定の關係なく、齒列不正との關係に於ては少數例(6例)に於ては之を認めしも大多數(106例)は正常にして偏位を惹起せり、恐らくは顎左右側の發育不均齊に因るものならん。(自抄)

11) 蒼鉛性口内炎標本供覽

渡 邊 孝

患者は30歳男子、驅微療法目的にて約4ヶ月半に24—25本の「サルバルサン」劑及び50本の蒼鉛劑の注射を受く。最後の注射より間もなく惡感、上下口唇腫脹、疼痛、糜爛、流涎を主訴として來院せるものにし

て口臭甚だし。對症療法に依り蒼鉛沈着を残し治癒せるものに就き標本供覽をなせり。詳細は原著として發表す。(自抄)

12) 「ヂフテリー」と家族感染

種 村 龍 夫

「ヂフテリー」の家族感染は臨牀上遭遇する事甚だ尠く文獻上記載されたるものも亦極めて稀なり。余は我教室に於て昭和14年8月より15年1月に至る6ヶ月間

に於て4家族に於て之を見たるを以て此處に述べんとす。今是等症例を表示すれば次の如し。

	姓 名	年 齡	性	發 病 推 定 時 日	診 斷 確 定 時 日	診 断	轉 歸
第1家族例 姉妹兄弟間に 感染せる例	大○ 親子	5	♀	3/VIII	5/VIII	咽 頭	死 亡
	大○ 敬心	8	♂	4/VIII	5/VIII	咽 頭	全 治
	大○ 美幸	13	♀	5/VIII	8/VIII	咽 頭	全 治
	大○ 教了	11	♂	10/VIII	11/VIII	咽 頭	全 治
第2家族例 姉妹母間に 感染せる例	龜○千○造	9	♂	3/X	13/X	鼻 腔	全 治
	龜○ 加代	33	♀	11/X	14/X	咽 頭	全 治
	龜○ 和子	13	♀	12/X	14/X	咽 頭	全 治
第3家族例	浦○ 聰子	4	♀	10/X	23/X	鼻 腔	全 治
	浦○ 義弘	11	♂	不 明	28/X	咽 頭	全 治
第4家族例 姉妹叔母姪 間に感染せ る例	山○二○子	18	♀	13/I	18/I	鼻 腔	全 治
	山○ 恵子	4	♀	不 明	18/I	咽 頭	全 治
	安○ 幸	5	♀	不 明	18/I	咽 頭	全 治
	安○ 修子	2	♀	不 明	18/I	咽 頭	全 治
	山○ 政子	15	♀	17/I	18/I	咽 頭	全 治

發病推定時日中不明とせるは各家族例第1例、診断後來院せしめて検せるものにして未だ自覺的症候を缺き日臨牀上疾病の初期を思はしめたるも發病時推定困難なりしもの。

追 加

豊 田 文 一

私は最近「デフテリー」家族感染の興味ある症例を経験した。即ち妊娠10ヶ月後半の29歳の家婦の喉頭「デフテリー」に遭遇し、血清10,000単位を注射し治癒せしめ得た。其後約10日にして男児を分娩した。然るに生後4日にして該新生児に鼻呼吸障礙が起り乳房の吸啜不能となり、診を乞はれた。鼻腔所見は粘膜の腫脹と少量の鼻汁が認められる。數日間粘膜の消炎療法を

試みたが消褪しない。鼻「デフテリー」を疑つて鼻汁の培養を行つた所「デフテリー」菌を検出した。本症例に於て興味のある點は妊婦に對し「デフテリー」の免疫を行ふことにより、其の兒に對しても生後久しきに亘り、殆んど例外なく極めて高度の免疫を得るものであるといふ、眞柄氏の業績に對する一異例であると考へられる。(自抄)

13) 最近11ヶ年間我が教室入院患者デフテリーの統計的觀察

開 發 忠 雄

演者は昭和5年より昭和15年に至る我が教室入院患者總數 3565 名中デフテリーの患者 79 名につき觀察せり。

年度別には逐年急激なる増加を示し

發生月別には11月を最高とし5月を最低とし秋冬夏春の順を示し

年齢別にみれば4歳最も多く5、6歳これに次ぎ大

半10歳以下なり。

性別にせば男：女=3:5にして10歳以上は女子に多し。

罹患別は咽頭、咽頭及び鼻腔、喉頭、喉頭及び咽頭、鼻腔の順序に減少す。以下主訴別、氣管切開、脈搏、熱及び使用血清量、血清病、死亡率等につきて概説せり。(自抄)

14) 咽頭に於ける有生異物

堀 謙 三

38歳の女子。来院1週間前鮎の刺身、煮付、焼物を食せるに2-3日後より右咽頭に疼痛あり。次第に増悪せるを以て来院せり。

検するに扁桃腺部、舌根部、咽頭後壁、食道入口部に魚骨を見ず。炎症所見なし。精検するに右側後口蓋穹上部に極めて小なる白斑あり。鑷子を以て除去せん

とするも容易に成功せず。「ルーベ」を以て擴大検するに小なる有生異物の該部に強く吸着し生存せるを確め鉗子を以て之を除去せるに咽頭痛忽ちにして去れり。摘出せる有生異物を動物學者の教示を仰ぎしにClinostomum Complatumと決定されたり。精細は原著として近く耳鼻咽喉科に發表の筈。(種村抄)

15) 扁桃腺周囲膿瘍より轉移性眼炎及び全身諸器官に膿瘍形成を來せる敗血症例

渡 邊 孝

患者は41歳男子。風邪後咽頭痛を來し、扁桃腺周囲膿瘍の診断の下に切開排膿ありたるも咽頭痛緩解せず、加之食物攝食全く不可能なるの故を以て来院す。来院5日にして右側、6日にして左側に轉移性眼炎を

惹起し、9日にして敗血症の下に死の轉歸を取れるものにして、剖検の結果定型的敗血症なる事判明せり。詳細は原著として發表す。(自抄)

16) 扁桃腺性敗血症に就いて

松 田 龍 一

演者は扁桃腺炎に續發する敗血症について其感染経路、症候、療法等につき綜說的叙述を行ひ、かゝる重篤なる合併症を事前に防止する様、之に對する智識を

有し、適當な處置を施すことが極めて肝要であることを強調した。(自抄)

大日本耳鼻咽喉科會北陸地方會第55回集會記事

種 村 龍 夫 編

昭和16年7月20日 於 金澤醫科大學耳鼻咽喉科學教室

1) 錐體尖内部造構殊に錐體尖蜂巢並に之と乳嚙蜂巢發育との關係

吉 見 正 夫

詳細は原著として十全會誌第46卷、第12月號に登載。

2) 乳兒中耳炎の臨牀的研究の3 遺傳的素因に就て

豐 田 文 一

中耳炎の家族的に多發することは既に先人により記載せられた所である。演者は乳兒中耳炎の臨牀的觀察

の1項目として家系的調査を行ひ、その概要に就て報告した。即ち102例の症例に於て、その両親に中耳炎の罹患をみたもの26例であつた。次に2名以上の同胞を有する場合63例に於て患者數を集計したるに201名の同胞中101名の患者數を得た。即ち50.2%±3.5%

となり、優性遺傳の豫期値と殆んど合致するのを認めた。更に演者は遺傳因子に就き言及する所があつた。詳細は醫事公論第1519號(16年9月6日)に登載。(自抄)

3) 女性の耳鼻咽喉科領域に於ける妊娠時自覺障碍の統計的觀察

進 宅 外 雄

調査人員は612名で此中妊娠時自覺障碍を有するものは268名(43.79%)であつた。

(i) 種類及頻度

自覺障碍中中耳に關するもの34.32%、鼻に關するもの22.62%、咽喉に關するもの32.29%、其他10.76%である。

(ii) 耳に關するものの中、眩暈及惡心を伴ふ者は障碍を有するもの39.92%、惡心21.26%、耳鳴9.70%、眩暈5.97%、難聴3.73%、耳閉塞感1.49%であつた。

(iii) 鼻に關するものの中、嗅覺異常は障碍を有するもの35.82%、鼻閉塞及衄血は夫々7.46%、噴嚏3.73%、鼻汁増加3.35%の順であつた。

(iv) 咽喉に關するものの中、味覺異常を訴へた者は障碍を自覺せし者の40.29%、咽頭不快感26.49%、聲音異常10.44%の順であつた。

尙演者は自覺症状と妊娠回数、初經年齢、妊娠浮腫、腎臟炎の有無、分娩時の難易との關係についても統計的觀察を試みたり。(自抄)

4) 鼻背腫瘍(蔓狀血管腫)

松 田 龍 一 渡 部 弘

18歳女子、4歳の頃より鼻背に膨隆を認め漸次大きさを加へ來り今日に及ぶとて來院、鼻背に腕狀の拇指頭大隆起あり、被覆皮膚には異狀を認めず、硬度は弾力性稍々硬、指頭を以て強く壓すれば搏動を感ず。縦切開を加へ結締織に圍繞且包埋せられたる拇指頭大の

腫瘍塊と思はれるものを剔出。此を單念に處理して迂餘曲折せる約11.5cmに及ぶ肥厚せる動脈をえたり。之に關する寫真數葉は月刊雜誌「耳鼻咽喉科」に登載の豫定。(自抄)

5) 臭鼻症に於ける手術的療法の變遷 附 久保護躬教授式手術患者供覽

種 村 龍 夫

臭鼻症療法に於ける所謂保存的療法は暫く之をおき、其手術的療法の變遷を見るに蓋し甚だ興味深きものあり。演者は之を次の如く分類し其各の優劣を経験上より批判せり。

1) 粘膜下に異物或は組織を挿入する法

- イ) 粘膜下に「パラフィン」注入法
- ロ) パラフィン板又は象牙を挿入する法
- ハ) 患者又は近親者或は死者又は動物の骨、軟骨を挿入する法

ニ) 田中氏法、鳥居氏變法

2) 鼻腔側壁を骨部と共に移動せしめて鼻中隔に近づける法

イ) Lautenschläger 氏第I, 第II, 第III法

ロ) Hinsberg 氏法, Seifert 氏法

ハ) Halle 氏法

3) Wittmaack 氏法

4) 久保護躬教授法 (Antro-Turbinal Methode)

演者は本症の各手術療法中久保教授法を以て最も進

歩せるものと斷言するも敢て過言ならずとし、最近施行せる患者を供覽し、其手術法に就きての注意點を述べざる處ありたり。(自抄)

6) 二腔性上顎洞に就て

渡 邊 孝

患者は19歳男子、兩側上顎洞並に篩骨蜂窠の慢性尖症の診斷の下に手術を施行せしものなるが、兩側共犬齒窩骨壁可成り厚し。7月4日右側、7月11日左側を施行せり。右側犬齒窩を鑿開し消息子にて内部を検するに甚だ小なるを確めたり。依つて粘膜を完全に剝離し見るに眼窩下壁と思はるべき甚だ薄き骨壁の内上方より外下方に走れるを知る。下方に凸面を向け、其度は相當なり。然るに眼窩壁と考ふるべく餘りに下降せるを以て、試みに小銳匙にて鑿開し内部を視ふに可成り大なる空洞あるを見、初めて二腔性上顎洞なるを知り、隔壁全部を除去するに、大きさ上下の比約3:2、上下兩腔を通ずる時は略々通常の大きさなり。下腔粘膜は纖維性に中等度肥厚し、濃厚、無臭、黃白色膿汁少量存す。上腔粘膜は纖維性浮腫狀に可成り中等度に

肥厚し多少充血し、下腔と同様なる膿汁少量存す。篩骨蜂窠位置、大きさ尋常にして、粘膜は纖維性に中等度肥厚するも膿汁なし。上下兩腔共中鼻道に開口せり。左側上顎洞も同様外上方、内下方の二腔に右側同様なる骨壁にて境界さる。上下の比1:3、右側と反對に凹面を下方に向けたり。兩腔共中鼻道に開口す。粘膜所見は下腔のもの纖維性浮腫狀に可成り高度に肥厚し、濃厚、無臭、黃白色膿汁多量に存す。上腔粘膜は纖維性浮腫狀に可成り中等度に肥厚し多少發赤するも膿汁殆んどなし。上下兩腔を通じたる大きさ右側と同様。篩骨蜂窠大きさ、位置尋常にして、粘膜は纖維性浮腫狀中等度に肥厚するも膿汁なし。

レ線像に於て明らかに二腔性なるを認め難し。

(自抄)

追 加

豊 田 文 一

私の得た症例は18歳の女子で根治手術に際し約拇指頭大の上顎洞が認められたが、其上方に眼窩の下縁に

迄篩骨蜂窠の一部が恰も2個の上顎洞が存する様考へられる症例を経験した。(自抄)

追 加

堀 謙 三

余は二洞性上顎洞の4例を経験せり。解剖的に見る

とあまり尠きものにあらざる如し。

7) 臨 牀 例

豊 田 文 一

1) 唾嚢治癒

16歳の男子、2歳の頃麻疹後に耳下腺炎を患ひ、耳後部に切開を受けたが、切開創は閉鎖せず、以來15年間唾液漏出の停止をみない。私はこの症例に對し外唾嚢を内唾嚢とする Deguise の術式に従ひ、治癒せしめ得た。

2) 齒性耳痛

30歳の男子、4日前に齒痛の爲齒科醫により抜齒を受けたが、その夜より左耳痛を訴へ、睡眠も妨げられるに至つた。診察するに耳鏡所見には變化はない。齒牙は下顎第1大臼齒は抜齒してある。抜齒創の肉芽は比較的正常であるが、周圍齒齦粘膜に多少の發赤がある。「レ」線像により第1大臼齒の一つの齒根が抜齒に際し折れ残根となつてゐるのを認めた。齒科に於て直

ちに殘根を拔去され、耳痛は拭ふ様に消失した。尙演者は齒性耳痛の神經支配に就き述べる所があつた。

3) ヒステリー性軟口蓋麻痺

20歳の學生、約1週間前風邪の氣味があつたが2-3日で治癒した。然るに其後舌運動障礙、言語障礙、流動物の鼻腔逆流が來た。局所所見としては咽頭粘膜には發赤或は腫脹を認めない。軟口蓋殊に左側に於て運動が鈍である。舌の痛覺、味覺に變化なく、發音せしめると「サ」、「ミ」、「ラ」行に障礙がある。「ヂフテリー」後麻痺の疑を以て「ビタミン」B₁の注射を行つた所2-3日にして輕快治癒に至つた。然るに其後10日

再び同様の主訴で私の外來を訪ねた。此處に於て神經性のものでないかを疑ひ、眼科的診察を行はしめた。視野の狹窄は左側に於て僅かに認めれるが、右には變化はない。瞳孔反應は動搖が著しい。眼底に變化はないが、右に眼瞼下垂がある。この眼瞼下垂は日により、その程度並に左右に移動する。即ち「ヒステリー」の際にみられる一徵候の様である。B₁の注射3回を行ひ、治癒した。所が第3回の發作は約2ヶ月後である。この場合もB₁を3回注射し治癒したのである。經過並に臨牀的所見より恐らく「ヒステリー」性軟口蓋麻痺と考へられる。(自抄)

追 加

松 田 龍 一

30歳の婦人に見られた「ヒステリー性嚥下困難の1例を追加。(自抄)

追 加

勝 木 直 次

齒性耳痛は甚だ多きものゝ如く特に小兒に多し。抜齒により簡単に治癒するを經驗せり。

8) 乳兒急性咽後膿瘍治癒例

勝 木 直 次

榮養かなりよき母乳乳養の幼兒。左下顎部雞卵大に腫脹す。咽頭に變化なく、扁桃腺に著變なし。左側急性中耳炎存在し耳漏多量なり。發熱 37°C、中耳炎の處置を行ひ歸宅せしめたるに翌日は經過良好にして體溫 36.9°C、ズルファミン内服せしむ。

然るに6日目に至り一般状態不良となり呼吸困難、嚥下障礙あり。左側下顎部腫脹強く、咽頭後壁就中左側腫脹強し。該部に切開を加ふるに黄色の膿多量に排出し、以後經過良好にして全治せり。(種村抄)

追 加

豐 田 文 一

咽頭膿瘍の切開に際し、大なる切開をなすことは膿汁を急激に排出し、膿瘍内に急激な壓力の低下を來し、之が爲頸部に於て迷走神經を刺戟し心臓の停止を

來すことが稀にある。故に可及的穿刺により、或は小切開により排膿を行ふ方が安全と思ふ。(自抄)

追 加

吉 見 正 夫

本症の1例を追加。2, 3醫師を訪れ次第に嚥下困難發熱を來し原因不明とて來院せるものに於て精檢す

るに咽後膿瘍たるを確診し、該部に小切開を加へ膿を
吸引排出せしめたるに至治せり。乳児の場合は精檢を
要す。

9) 上氣道結核性乳嘴腫症例

開 發 忠 雄

症例 21歳の女子、嚥下障碍及び咳嗽を主訴とし5
月14日來院す。病歴とし本年頭初食時に咽頭にしみる
感を覺え、内科醫の塗咽により一時自覺的症狀は消退
せるに、約1ヶ月前より該部に再びしみる感並に嚥下
痛を訴へ同様な處置を受けたるも快癒に向はず。轉
々醫を代へ再往日を送る中高熱を發するに至り、嚥下
困難のため流動食攝取の狀態にて今日に至る。

現症 一般狀態は相當強度の羸瘦をみる。打診、聽
診共に著變を認めず。耳鼻共に著變をみず。口腔粘膜

は僅かに貧血狀を呈し、兩側下顎齒齦粘膜、口蓋帆、
兩側口蓋扁桃腺、咽頭口腔部側壁、更に舌根扁桃腺部、
會厭軟骨部、梨子狀窩に亘り廣範圍の乳嘴狀腫瘍を認
めたり。演者は結核を考慮し、兩側扁桃腺附近より得
たる組織標本並に塗抹標本を檢し同時に胸部「レ」線撮
影により結核性なるを知れり。本症が比較的急速なる
経過をとれると思惟されるは胸部疾患が重要な役を
演じたるは疑を容れず、又内科的疾患との關係の重要
性をも口述せり。(自抄)

10) 聲 帶 囊 腫 症 例

渡 邊 孝

演者は52歳男子の右側聲帯に生じたる嚢腫と思
惟すべき症例に就き述べたり。約5ヶ月以來嘶嘎を訴
へたり。右側聲帯中央部稍々前方に位し、略々小豆大
膨隆あり。表面平滑、黄灰白色を呈す。右側聲帯運動
甚だ弱く、發聲時聲帯間に間隙を示す。局所麻醉の下
にフレンケル氏鉗子にて膨隆部を把握し少しく牽引す
るに菲薄なる膜の中より黄褐色一見假性眞珠腫を思は

しむる如き硬度を有する小豆大より少しく小なる塊出
づ。嚢腫の組織學的所見は外層重層扁平上皮細胞、中
層は鬆粗なる結締織にして所々分泌腺を認む。内壁は
缺如す。内容物は無構造物質にして、内に剝脱上皮細
胞及び結締織様細胞存す。(詳細は十全會誌第46卷第
11月に登載)(自抄)

11) 我教室食道異物の統計的觀察 其2. 最近7年間に於ける症例

渡 部 弘

演者は昭和8年10月より昭和15年7月に至る約7年
間に於ける我教室の食道異物89例に就き統計的觀察を
試みたり。

1. 種類別には貨幣47例(1錢銅貨44例, 10錢白銅,
5錢白銅及び5厘銅貨各1例), 魚骨13例, 義齒10例,
玩具類11例(ブリキ製玩具, 鉛製玩具及び「セルロイ
ド」破片各2例, 眞鍮製玩具, 「オハジキ」, 獨樂, 智
慧の輪及び玩具用釘各1例), 金屬類4例(釣針, 安全
「ピン」, 鉛筆「キヤップ」及び「ザル」の破片各1例)そ
の他碁石(白), 貝殻, 「ボタン」及び「クワイ」各1例な
り。

2. 年齢的には魚骨及び義齒は壯年及びそれ以後の

者が殆ど占め、貨幣及び其他異物は15歳以下の者が殆
ど占め、就中3, 4, 5歳の小兒に著明なり。

3. 性別的には貨幣及び玩具類以下の物は男は女に
比し著しく數多きも、其他の異物では男女間に著しき
差異は認めしめず。

4. 職業的には15歳以下の子供に在りては農業、勞
働者、漁業等比較的勞働階級の子弟に多く、亦成人に
在りては農業が過半数を占めたり。

5. 誤嚥日より除去までの時間的關係では當日除去
せるもの最も多く、日を経るに従ひて漸次減少せり。

6. 異物の嵌入個所に關しては種類の別を問はず第
1狹窄部が最多數を占め、第2狹窄部及び中間部位が

略同数を示し次に位せり。但し魚骨のみ中間部位に比較的多し。

7. 異物誤嚥の動機に關しては貨幣は遊戯中、魚骨は食事中が斷然多く、義齒にありては睡眠中と食事中とが略同数を占め、其他では遊戯中と食事中とが著明

なり。

8. 自覺症狀としては嚥下痛最多數にして、嚥下障礙及び疼痛之に次ぎ、更に嘔吐、呼吸困難、異物感等の順なり。(自抄)

追 加
勝 木 直 次

捲綿子の食道異物 2 例を追加す。

12) 食道異物(鉛筆鞘)症例

松 田 龍 一
渡 邊 孝

鉛筆鞘の食道異物は稀である。演者等の症例は10歳の女兒で、長さ 4.5cm、最大直径 0.85cm のブリキ製鉛筆鞘で、尖端を上方に向けて介在してゐたもので、

その介入状態も珍しいと考へられたものである。(自抄)

13) 最近數年間に於ける我國耳科界の聾啞問題に對する寄與に就きて

松 田 龍 一

最近數年間に於て我國耳科界に於てなされた表題の業績に對して綜說的叙述を行つた。概要は日本醫學及

健康保險第3250號に登載。(自抄)

金澤醫學會第171回例會

1月24日(土曜日)午後2時より金澤醫科大學法醫學講義室に於て開會、其の演說次の如し。

1) 電流性眼球震盪生理知見補遺

金澤醫科大學耳鼻咽喉科學教室(主任 松田教授)

專攻生 加 納 進

演者は家兎の外聽道骨部に兩極性に電極を裝用し平流電氣刺戟を加へて、電流性眼球震盪並びに電流性後眼球震盪を發現せしめて、之が質的並びに量的觀察を試みたり。使用せる電流強度は2.0 M.A.乃至4.0 M.A.にして刺戟時間は10秒乃至30秒なり。本例會に於

ては其の實驗の一部即ち潜伏期、震盪回數、平均一震盪持續時間、震盪速度、刺戟調及び電流性後眼球震盪の發現率等に就て概要を申述べたり。尙詳細は原著として十全會雜誌に發表の豫定なり。

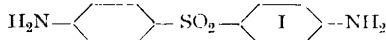
2) Diphenylsulfon 誘導體に關する化學的並に實驗化學療法的研究、
特に一新物質 4-Amino-4'-nicotinylamino-diphenylsulfon の肺炎
双球菌感染に對する治療効果に就て

金澤醫科大學藥物學教室(主任 石坂教授)

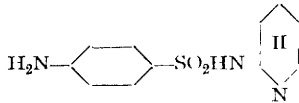
三 浦 孝 次

4.4'-Diamino-diphenylsulfon (I) は溶連菌感染に對し極めて強大なる治効力を發揮するものなる事に就ては既に Buttle 等の指摘せる所なり、余は肺炎菌感染に對する本物質の作用を精研せしに、其毒性強烈なるが爲め試獸に對し之を治癒せしむるに足る大量を投與し得ざりしも、効果の強大なることは確實にして本品 1mg は實に Sulfapyridin (II) 10mg にも匹敵するものなる事を認識し得たり。

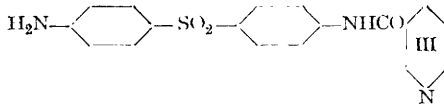
此事實に徴し余は Diphenylsulfon 列化合物中に優秀治療物質を發見せんことを期し希望と確信を以て研究に邁進せり、其成績次の如し。



4.4'-Diamino-diphenylsulfon



Sulfapyridin



4-Amino-4'-nicotinylamino-diphenylsulfon

既知並に未知の多數の Diphenylsulfon 誘導體を合成し、動物實驗を以て一々其等の作用を詳細に検討し遂に Diamino-diphenylsulfon の1個 NH₂-基を Nicotinsäure を以て Acyl 化し得たる 4-Amino-4'-nicotinylamino-diphenylsulfon (III) は治療物質として極めて興味あるものなる事を識り得たり。即ち余は此化學的變化を興ふる事により母體 Diamino-diphenylsulfon の毒力を一舉 1/10 以下にまで低下せしむるに成功せり。而して本物質の肺炎菌感染に對する効果を Sulfapyridin と比較し次表に示すが如き成績を得たり。

1) 4-Amino-4'-nicotinylamino-diphenylsulfon は試獸に對する毒性 Sulfapyridin と相伯仲す、しかも此毒性は甚だ僅微なるものにして母體 4.4'-Diamino-diphenylsulfon のそれに比し 1/10 以下なり。(最大耐量参照)

2) 4-Amino-4'-nicotinylamino-diphenylsulfon は肺炎菌 I, II, 及び III 型菌-並に溶連菌感染 Maus に對し卓効を顯し、其治療効果は何れの場合に於ても遙に Sulfapyridin を凌駕す、特に I 型菌感染に對し格段の優越性を現し、其治効力は Sulfapyridin の約 4 倍に相當す。

物 質	1回の投與量(mg) [1日1回5日間投與(per os)]	肺炎菌 兩型			最大耐量 (mg) [pro 18g Maus]
		試獸4匹中完全に 治癒せる動物數	I型	II型	
4-Amino-4'-nicotinylamino- diphenylsulfon	20	4	2	3	>200
	10	4	1	1	
	5	4	0	0	
	2.5	2	0	0	
Sulfapyridin	20	4	1	1	>200
	10	2	0	0	
	5	1	0	0	
	2.5	0	0	0	

註：4.4'-Diamino-diphenylsulfon の最大耐量は 2.5mg なり。